

鳴門教育大学
研 究 紀 要

(人文・社会科学編)

第 11 卷

鳴門教育大学

1 9 9 6

執筆者紹介(掲載順)

小 野 米 一	鳴門教育大学言語系(国語)教育講座
谷 崎 昭 子	鳴門教育大学言語系(英語)教育講座
向 井 清	鳴門教育大学言語系(英語)教育講座
藪 下 克 彦	鳴門教育大学言語系(英語)教育講座
渡 辺 一 保	鳴門教育大学言語系(英語)教育講座
渡 辺 孝 子	福井大学非常勤講師
尾 野 比左夫	鳴門教育大学社会系教育講座(西洋史)
フェルドマン オフェル	鳴門教育大学社会系教育講座(政治心理学)
喜 多 三 佳	鳴門教育大学社会系教育講座(法学)
齋 木 哲 郎	鳴門教育大学社会系教育講座(中国哲学)

鳴門教育大学研究紀要

(人文・社会科学編)

第11巻

1996年3月19日 印刷

1996年3月19日 発行

編集兼発行者 鳴門教育大学

〒772 鳴門市鳴門町高島 Tel(0886)87-1311

代 表 者 野 地 潤 家

研究紀要委員会代表 中 川 存

印 刷 所 長町美術印刷(有)

〒772 鳴門市撫養町南浜字蛭子前西55

Tel (0886) 86-2325(代)

鳴門教育大学研究紀要（人文・社会科学編）

第 11 卷（1996）

目 次

1. アイヌ語話者の日本語に見られる母語の干渉
—北海道静内町織田ステノ氏の場合—
.....小 野 米 一 (1)
2. ディケンズの歴史的小説『二都物語』
—その主題と構造—
.....谷 崎 昭 子 (15)
3. カーライルと歴史 (3)
—*The French Revolution: A History*について—
.....向 井 清 (27)
4. On Certain Semantic Differences between English and Japanese
Quantifier Expressions
.....藪 下 克 彦 (43)
5. プロセス重視の英語教育観
.....渡辺 一保・渡辺 孝子 (65)
6. リチャード3世の王位篡奪の特質
.....尾 野 比左夫 (77)
7. 政治現実と現実創造：日本における政治言語の研究
.....フェルドマン オフェル (97)
8. 『天台治略』訳注稿（一）序文
.....喜 多 三 佳 (三)
9. 王莽と漢代の儒教
—その儒家思想史における位置付け—
.....齋 木 哲 郎 (一)

アイヌ語話者の日本語に見られる母語の干渉

—北海道静内町織田ステノ氏の場合—

小 野 米 一

(キーワード：アイヌ語話者、母語の干渉、日本語北海道方言、日本語淡路島方言)

はじめに

(1) 目的

小稿は、アイヌ語を母語とする話者たちの日本語がどのようなものであるかを明らかにしようとするものである。すでに指摘したように¹⁾、音声面においては母語アイヌ語の干渉が認められるが、文法面・語彙面にはほとんどそれが認められなかった。それは主として北海道静内町在住の葛野辰次郎氏の資料に基づいたものであり、その後さらに多少の検討を加えたが²⁾、小稿では、同じく静内町在住の織田ステノ氏の資料に基づいて³⁾、音声面に見られるアイヌ語の干渉と思われる特徴を具体的に指摘するとともに、文法面・語彙面にもその多少の可能性が有り得ることを示し、加えてその日本語に見られる北海道方言⁴⁾及び明治期に静内町に入植した兵庫県淡路島の人々の方言⁵⁾との関連について吟味する。

(2) 話者(織田ステノ氏)

織田ステノ氏は、本人の話によれば、明治32(1899)年夏の昆布取りのころ(7月20日)に、静内町元静内に生まれたという。ただし、戸籍上は明治35(1902)年5月15日生まれとなっている。幼いころに両親をなくし、祖母ソレウテさんに育てられた。祖母は日本語を使うことをも禁じ、日常生活から信仰・儀式に至るまですべてアイヌの風習を守って育てた。また、叔父イタクラッチさんにユーカラ(神謡)やウエペケレ(昔語り)などを教えられた。20歳を過ぎてから結婚し、子どもが学校へ行くようになってから必要に迫

られて日本語を覚えたという。本人は学校へ行くこともなく、文字も覚えなかったことが、かえって、織田氏の記憶力を支えることになったようである⁶⁾。

まことに残念なことに、平成5(1993)年4月30日に亡くなった。

(3) 資料

平成3(1991)年10月27日(150分)と同年12月25日(90分)に、北海道静内町豊畑のご自宅で、織田氏に聞かせていただいた日本語会話を主たる資料とする。また、菅泰雄氏による文字化資料⁷⁾、古原敏弘氏による録音資料⁸⁾を参考にした。これらは幸いに録音を私自身の耳で聞き直すことができた。ほかに、北海道教育委員会(1991)所載の織田氏の談話資料(pp.95-169, 若月亨・藤村久和訳註)を参考にした⁹⁾。

1. 音声面に見られる母語の干渉(と思われるもの)

1-1 母音をめぐって

アイヌ語の母音は日本語と同じくア a, イ i, ウ u, エ e, オ o の五つであるという(田村1978:197)。ただし、ウ u がオ o にやや近く、モッコ(婿)のような発音が聞かれることがある¹⁰⁾。

また、主に助詞の「に」が、アタマネ(頭に)、ソコネ(そこに)、エネ(絵に)、フーチネ(おばあさんに)、ソントキネ(その時に)、イッショネ(一緒に)、ホントネ(本当に)、ハタラクヨーネ(働くように)、など、「ネ」と発音される傾向が強い。イ i 母音とエ e 母音

との区別は明瞭であるが、サンネン（三人）のような例もあり、検討を要する。ただし、コイ（声）、オマイ（お前）、カイル（帰る）、コシライテ（こしらえて）などの $e > i$ は日本語北海道方言を取り入れたものであろう。

1 例だけであるが、カウォ（顔）のウォwo音が観察された。

なお、アイai、ウイui、エイei、オイoi、アウau、イウiu、エウeu、オウouは、日本語では連母音であるが、アイヌ語ではay, uy, ey, oy; aw, iw, ew, owという二重母音であると考えられる。

1-2 長音化

第1音節を引き伸ばす発音がしばしば観察された。名詞では、コーレ（これ）、ソーレ（それ）、オーラ（おれ）、カーゾク（家族）、オーヤ（親）、マーゴ（孫）、オークサン（奥さん）、ターニン（他人）、ターダモン（ただ者、常人）、ナーマエ（名前）、アーメ（雨）、イーシ（石）、ケーリ（keri, 靴）、ネーコ（猫）、ターマ（玉）、ユーカ（床）、ヨーゴザ（横座）、ハーカ（墓）、カーッコ（格好）、モーヨー（模様）、コートシ（今年）、アート（後）、ロックマイ（六枚）、ミーバン（三晩）、アースビニ（遊びに）など、動詞では、アーム（編む）、アール（ある）、イーキテ（生きて）、オーキテ（起きて）、カーエッテ（帰って）、クワッテ（食って）、サーケル（裂ける）、ターベル（食べる）・ターベテ（食べて）、ニーゲル（逃げる）、ネール（寝る）・ネータ（寝た）、ホーシアゲタ（干し上げた）、ミータ（見た）・ミータイ（見たい）、ワーシレタ（忘れた）・ワーシレナイ（忘れない）、ワラウ（笑う）、ワール（割る）など、形容詞ではクーロイ（黒い）、ネームタイ（眠たい）など、非常に多くの例がある。（フタバーン（二晩）のように、第1音節以外の音節を伸ばす例もあるが、多くはない。）アイヌ語北海道方言では母音の長短の区別はないという（田村1978:199）が、このように、特に第1音節を引き伸ばす傾向は、織田氏が日本語を身につけ、日本語を使おうとするときに、現れた特徴である。

アイヌ語の干渉とは言えないかもしれないが、織田氏の外国語としての日本語に見られる特徴の一つとして指摘することができる。

ただし、1音節語を引き伸ばす、テーテ ッチー カケテ（手で土をかけて）や、同じく格助詞がかかわるミーハイッテ（実が入って）、メーフクレアガッテルケン（目がふくれあがっているけれど）、アノヨーイッテモ（あの世に行っても）などは、日本語北海道方言を取り入れたものと思われる。

1-3 いわゆる濁音の清音化について

アイヌ語には、12の子音、k, s, t, c, h, p, m, n, r, ' ; y, w, があるという（田村1978:197）。この中には、日本語の濁音の頭子音に当たる有声子音、g, z, d, b, が含まれていない。音の聞こえとしては語頭以外でガ・ザ・ダ・バ行音のように聞こえることがあるが、日本語の清音と濁音とに対応する関係はないことになる。

織田氏の日本語音声としては、特に語頭で、いわゆる濁音が清音のように発音されることが多い。例えば、ガ行音がカ行音に発音されたものとして、カッコ（学校）、カース（ガス）、カンバッテ（がんばって）、クルリ（ぐるり）、クワッスリ（ぐっすり）、クット（ぐっと）、ケンキ（元気）、ケンバ（現場）、コネンメ（五年目）、コマカシ（ごまかし）、コハン（ごはん）、コークロサン（ご苦労さん）などがあり、ザ・ダ・ジャ行音がタ・チャ行音に発音されたものとして、タイガク（大学）、タイジニ（大事に）、タシテ（出して）、タマッテ（黙って）、タメ（だめ）、タンパン（談判）、オクタサン（奥田さん）、タカタサン（高田さん）、チーサン（爺さん）、チカン（時間）、チパン（地盤）、チブン（自分）、オーチカイシャ（王子会社）、フチカワサン（藤川さん）、ヘンチ（返事）、チェッタイ（絶対）、オチェン（お膳）、チャイリョー（材料）、チャマ（邪魔）、チューコー（十五）、チュージ（十時）、〜チュー（〜中）、チョーズナ（上手な）、カタツケテ（片付けて）、テカケテ（出かけて）、テキテ（できて）、テル（出る）・テテ（出て）・

テナイ（出ない），トーキョー（度胸），トーマッテ（どうやって），トーロ（道路），トコ（どこ），トマンナカ（ど真ん中），トンナ（どんな），キノトク（気の毒），タチトマッテ（立ち止まって）などがある。また，バ行音はバ行音に発音され，パーサン（婆さん），パソニ（晩に），プチニ（無事に），ペンキョー（勉強），ペントー（弁当），ボクジョ（牧場），ポッコ（棒っこ），オボイタイ（覚えたい）のようであった。この特徴は非常に強いものがあり，助詞・助動詞の類の，キモチカ（気持ち），アルタケ（あるだけ），アレタコレタ（あれだこれだ），フシギテ（不思議で），ソレテモ（それでも）などにも及ぶ。ただし，ゲンキ（元気），ダイジ（大事），ババ（婆）のように，語頭で濁音に発音される例が全くないというわけではない。語頭濁音はアイヌ語にないだけに，織田氏としては，習得がよほど困難だったのであろう。

1-4 いくつかの特色音節について

アイヌ語で使われるトゥtu音は，ツキ（月），ヤツラ（奴ら），テツナッテ（手伝って）などに時に現れるが，どちらかと言えばトゥtuよりもツtsuに近く，むしろチギ（次），チチ（土），チクル（作る），チナグ（つなぐ），チカレテ（疲れて），チケナイバ（つけなければ），ハチモノ（初物），ニモチ（荷物），ヤチ（やつ），シトチ（一つ），ミッチ（三つ），サンガチ（三月）などチ，またはイクチュ（いくつ），フタチュ（二つ），クッチュケテ（くつつけて）などチュと発音することが多かった。ツtsu音がアイヌ語にないばかりでなく，織田氏が身につけた日本語北海道方言でツ・チ・チュの区別があいまいであったために（チュはアイヌ語にある），このような結果になったのであろう。

アイヌ語で使われるイエje・ウィwi・ウェweは，織田氏の日本語中には現れない。ウォwoはカウォ（顔）の例があったが，これも現れないと見てよいであろう。

結局，アイヌ語音としてはあっても，日本語にない音は，織田氏の日本語では使われていないと言える。

1-5 いわゆる拗音節

アイヌ語にはチャca・チュcu・チョcoを別にすれば，いわゆる拗音節がない。そのため，拗音を含む音節が，オケヤクサン（お客さん），キョー（今日），キョーダイ（兄弟），キョーネン（去年），ノーキョ（農協），ビョーイン（病院）など，非拗音として発音されることがしばしばある。アイヌ語の干渉と考えられる。ただし，キョーダイ（兄弟），ビョーイン（病院）もあって，織田氏が拗音を持たないわけではない。チャ（茶），チューガク（中学），チョーナンボー（長男坊）のチャ・チュ・チョはむしろ使われている。

アイヌ語ではまた，和人のことをシャモsjamoともサモsamoとも言い，アイヌの英雄シャクシャインをサクサインとも言う。つまり，シャ行音とサ行音の区別がない。イサ（医者），サベル（しゃべる），サッチ（シャツ），ソージキ（正直），ソッテ（背負って），イッソケンベ（一所懸命），イルンデソー（いるんでしょう）などとともに，イシャ（医者），オシャベリ（おしゃべり），ショッテ（背負って），イッショケンベ（一所懸命），イルンデショー（いるんでしょう）もある。さらに，シャッポロ（札幌），ミショ（味噌），ショー（そうだ），イッショク（一足），シャンジョク（三足），またシェンシェイ（先生）の例もある。このように，織田氏がシャ行音とサ行音の区別を持たないのは，アイヌ語の干渉によるものであろう。

1-6 いわゆる閉音節

アイヌ語の子音k, s, t, p, m, rなどは，itak（ことば），kes（毎），pit（小石），cep（魚），kim（山），kor（持つ）など，閉音節の末尾音となることができる。日本語にはこのような閉音節はない。織田氏の日本語にもこのような閉音節は現れない。

1-7 音変化

アイヌ語における音変化の一つとして，pon（小さい）+sapo（姉）→poysapo, kotan（村）+サく助詞→kotaysa, carowen（悪口）+シル（する）→carowaysiruに見られるような，～ns→～ysの音変化がある。織田氏の日本語には，

これに当たる、アイシン（安心）、オイセン（温泉）、メイシ（綿糸）、ユーカイシル（湯灌をする）、ポータイシテ（ボタンをして）、オーエイシテ（応援して）などがある。セイセー（先生）も1例だけ耳にした。アイヌ語の干渉とされる。

1-8 語アクセント

2音節名詞の例をあげれば、

○●▲ 風・これ・庭・水（Ⅰ類）、村・雪（Ⅱ類）、味・腹

○●△ 顔・口・水・道（Ⅰ類）、石・川・下（しも）・村（Ⅱ類）、土・花・耳（Ⅲ類）、糸・空・中（Ⅳ類）、桶・窓（Ⅴ類）、赤・後・穴・家・いも・奥・親・箆・先・外・鍋・肉・墓・薪・横

●○△ 花（Ⅲ類）、上（かみ）・種（Ⅳ類）、秋・声・春・婿（Ⅴ類）、赤・朝・後・杭・白・筋・粒・天・鍋・前・孫・訳のようであって、これらは日本語北海道方言を身につけたときに、アクセントもあわせて学んだものであろう。「水」「村」「花」「赤」「後」「鍋」などに、アクセントの揺れが見られるが、アイヌ語の干渉とは思われない。

1-9 プロミネンス・イントネーション

音節を引き伸ばしたり、繰り返して表現を用いることによる、プロミネンスの使用が頻繁であって、これはアイヌ語の干渉と見られる節がある。（1-2及び2-5参照。）

イントネーションはしばしば平板的であり、ここにもアイヌ語による話ぶりの特徴が観察されるように思う。

2. 文法面に見られる母語の干渉（と思われるもの）

2-1 自動詞・他動詞の混用

○オンナノコ フタリオッテ、サムシーッテ
オトコノコ モラッテ ソダッテ（子どもは女の子が二人おって、それでは寂しいというので男の子をもらって育てて）

○セナカニ シサ アタッテ コヤッテ（背中にひざを当ててこやって）

○リーッパナ ウチ タッテ（立派な家を建

てて）

○ソノワカイシ トマッテ アシタ カイツテモラオーッテ（その若い衆を今晚泊めて明日帰ってもらおうと）

○おらあた小さい時はねえ、その次からあの、サランペくsaranpe＝木綿布の敬称＞（を帯状に裂いたものを）こう通って、（結んで、余りを）ぶら下げてあったの。（北海道教育委員会1991:124）

など、「ソダッテ」「アタッテ」「タッテ」「トマッテ」「通って」はいずれも自動詞が用いられているが、「育てて」「当てて」「建てて」「泊めて」「通して」と他動詞を使うべきであろう。

○オハカニ ミルモンダカラ（お墓に見えるものだから）

○ハカノヨニ ミセルモンダカラ（墓のように見えるものだから）

○女の子一、3人に男の子一、ふた一りできて、一番兄貴の方が……急性肺炎で……殺したの。（北海道教育委員会1991:125）

では、「ミル」「ミセル」は「見える」、「殺した」は「死んだ」と、それぞれ自動詞を使うべき文脈である。

また、「オセーテモラウ（教えてもらう）」「カミサンニオセーテ（神様に教えて）」は、それぞれ「教えてもらいたい」「教えられて」と解すべき文脈である。

これらは、ただちにアイヌ語の干渉とは言えないかもしれないが、少なくとも織田氏が外国語としての日本語を身につけて行くときになんらかの障害となるものがあって、いくぶんねじれた表現となったものと思われる。

2-2 助詞の使い方

織田氏の日本語には、助詞の使い方にやや独特のものがある。

○オセルタメニ オレタカミサンワ ワカイシアタカラ トシヨリカラ ワルクチコイト（教えるために天から下った神様に、若い衆たちから年寄りから、悪口を言って）

の「カミサンワ」は「神様に」に当たる。逆に、

○チブソニ ヤカマシ ユーモンダカラ（自

分はやかましく言うものだから)

○タダノシトラニ ハカノヨニ ミセルモン
ダカラ (普通の人らは墓のように見えるもの
から)

○イマニ モー オヒーサンモ ハイッタン
(今はもうお日さまも沈んだし)
などの「チブソニ」「タダノシトラニ」「イマ
ニ」の「ニ」は「は」に当たると考えられる。
また,

○ニンゲンノ キモチ イーク モツモンダ
(人間は心掛けを良く持つべきものだ)
の「ニンゲンノ」の「ノ」も「は」に当たるで
あろう。

「ニ」にはさらに、「を」「の」「で」に当
たるとされる用法がある。

○オトーサン オカーサンニ タイジニシテ
(お父さん、お母さんを大事にして)

○オマエニ ミテヤレバ (お前を見てやれば)

○イモノカミサンニ オガンデ (いもの神様
を拜んで)

○いもうとに (=を) はんだかにしたーとか
(北海道教育委員会1991:98)

○「この子ー、もし、殺すんなら、わしに
(=を) 殺せー!」(同上:127)
などの「ニ」は「を」に当たる。

○ジブソラニ メンドー ミテクレル (自分
らの面倒を見てくれる、自分らを世話してく
れる)
の「ニ」は、「の」に当たるとも「を」に当た
るとも解されようか。

○ムカシワ ナイモンダカ アーメ フッテ
モ ソートニ オートツタリ ハネタリ シタ
モノ。(昔はテントがなかったものだから、
雨が降っても外で踊ったり跳ねたりしたんだも
の。)

○チューイチネン シラオイニ ハタライテ
(十一年間、白老で働いて)

○コナイダ ユーノ ハイッタ イワイ マ
チネ ヤッタ ノ。(こないだ、結納が入った
お祝いを町でやったの。)

○ヤークバノ ニシパト ノーキヨノ ニシ
バ キテル マエニ ナキナガラ (役場の旦那

と農協の旦那が来ている前で泣きながら)

○フーチとこに (=で) 煮一炊きして (北海
道教育委員会1991:102)

○おらはー、フチや、エカシのねき (=傍)
にあーすんで。(同上:105)

○みーっ日そこに (=で) 大豆、刈りごなし
(=刈って乾燥する) やっていたの。(同上:
112)

などの「ニ」は「で」<場所>に当たる。

○マナイタ タシテ モラッテ ソコエ コ
ヤッテ キッテ コンド アーツケタ (まな板
を出してもらって、そこでこうやって切って与
えた)

の「ソコエ」の「エ」も「で」に当たると考え
られよう。

これらの助詞の使い方を通覧すると、織田氏
が日本語の助詞を十分には習得できていなかった
と思われるが、アイヌ語の場所を表す *ta* ま
たは *otta* が日本語の助詞「で」または「に」
に当たることをも考え合わせる必要があろう。
となって、ここにアイヌ語の干渉を認めること
ができる。

いまひとつ、日本語の副助詞「しか」は打ち
消しの言い方と呼応するが、織田氏は

○フチアベニ イッボンシカ イナウ タテ
ル ノ。(火の神様には一本しか御幣を立てない
ものなのだ。)

○昔はあれ、ひとよ1枚しか (=だけ) 着
せるんでないかなあと思う。(北海道教育委員会
1991:118)

のように、肯定の言い方で使っている。これは、
アイヌ語の *patek* が「しか」にも「だけ」
「ばかり」にも当たり、肯定の文中で使われる
ことと関連があろう。すなわち、ここにもアイ
ヌ語の干渉を認めることができる。

このような表現について子細な検討を加えて
行くならば、さらに多くの点でアイヌ語の干渉
を指摘することができるかもしれないが、今は
その可能性を見いだしたにとどまる。

2-3 文末詞「ノ」による言い切り

織田氏のことばづかいには、これがまた多く
観察される。(葛野氏の日本語にも多い。)

○ユーヤッテミテ コヤッテ ノボル ノ。
(こうやってみて、こうやって登るんだ。)

○カエッテ キタ オーコル ノ。(帰って来たら怒るんだ。)

○ユーノワ アタリマエダッテ ユー ノ。
(文句を言うのは当たり前だって言うんだ。)

○オニギリ ヨッチ ノコシテ オク ノ。
(おにぎりを四つ残しておくんだ。)

○オトーサント オカーサント サンニンシテ オン ノ。(お父さんとお母さんと三人でいるんだ。)

○センセガ ワカラン ノ。(先生が分からないんだ。)

○ナーモ ネーマッテ ヤレナイ ノ。(ちつとも座ってできないんだ。)

○ソレガ フトイ ノ。(それが太いんだ。)

○オラモ ビックリシタ ノ。(私もびっくりしたんだ。)

○キナデ チクッタ ヤチ ドント イレテ、オハカ モッテ イッタ ノ。(キナで作ったやつをたくさん入れて、お墓に持って行ったんだ。)

○ワルイモンダベカト オモッテ カンガエテ イタ ノ。(悪いものなんだろうかと思って、考えていたんだ。)

のようである。アイヌ語の干渉かどうかは分からないが、アイヌ語話者の日本語の中に極めて多く観察される点は注意しておいてよからう。2-4 言い切りにしないで続ける表現(ことにウエベケレ)

文を言い切りにしないで、次々に後へ後へと続けて行く言い方が顕著である。

○オトーサンヤ オカーサン ダイジニ シテ、ハタラキニ テテ、パンニ カエッテ クレバ 『オトーサン オカーサン、ゲンキテイタカ』ッテ ソトカラ サワイデ ハイレバ (お父さんやお母さんを大事にして、働きに出て、晩に帰ってくれば、『お父さん、お母さん、元気でいたか』って、外から騒いで入れば) <最後を「入った」と言い切りにするばかりでなく、途中でもいくつかの文に切ることができる>

○オーキナ ナベデ タククライ コンドベチニ ソッテ コンド (大きな鍋で炊くくらい別に背負って) <「背負った」と言い切りにしてもいいところ>

○イロイロ ミンナ ハナシ カタリ (いろいろとみんな語り合って) <「語った」と言い切りにしてもいいところ>

○こんどふたーりでエトモチンネ<etomo cinne=でたらめに>川渡ってー、着る物(の裾まくって)暗いから、(笑い)お一尻出して、手一つないでー、川渡る、このへーそまんで、深いとこー入って。「がんばれよー、ひとりー、転んでもひとりさえ、あれすれば(→杖になれば)いいんだから」ってふたーりで手一つないで川向うに渡って、こんど近道して、フーチの家さまっすぐおらあたー、ムイテノとふたーりではーしって…。(北海道教育委員会1991:114)

北海道教育委員会(1991)では、途中の「入って」のところに句点をつけ、終わりの「はーしって」には「…」と句点をつけている。このように、織田氏の話ぶりは、どこで切れるともなく、文が長く長く続いて行く。これはユカラ(英雄叙事詩)やカムイユカラ(神話)、ウエベケレ(昔語り)を得意とした織田氏の、そうした口調がおのずから反映したものではあるまいか。実際の会話では、文を言い切らないで、コンド(今度、それから)を多用しながらことばを続けていくのも、アイヌ語の oro wano(そして、それから)に引かれているのかもしれない。

○シッポノ ネギワカラ キレバ ココラカラ キッテ アル ノ。(しっぽの根元から切れればいいものを、ここから切ってあるんだ。)というような、文の続きをきちんとと言ってしまわないで次へ次へとつないでいく言い方も、ここにあげておいてよからう。

2-5 繰り返し表現

これがまた多い。萩中他(1992)の「いもの神様が人間にいもを授けた話」(古原敏弘氏翻字, pp.216-270)から拾っても、「一回行ってみるかなみるかなって」「行ってみる行ってみるって」「東の山登って登って登って」「～と思いきい」「下がって下がって」「道迷って歩って、

歩いて歩いて歩いて」「また頭下げて、頭下げて」「手合わせて拝んで拝んで」「とんで下がって下がったけ」「お説教聞いて聞いて」「手合わせて拝み拝み」など、数多い。アイヌ語の表現と関連があるのではあるまいか。

2-6 反射代名詞「自分」の使用

アイヌ語では、名詞や動詞に人称接辞をつけて、ku=kor-sike(私の荷物), a=kor-sike(あなたの荷物), ku=nukar(私が見る), e=nukar(あなたが見る)のように言い表す。織田氏が名詞や動詞の前に「自分の」「自分が」と反射代名詞を多用することがあるのは、こうしたアイヌ語の表現と関連があろう。例えば、

チブノ ムラ (自分の村), チブノ ウチ (自分の家), チブノ ベントー (自分の弁当), チブノ ニモチ (自分の荷物),

チブノ チクッタ モノ (自分の作ったもの), チブノ タベル ヤチ (自分の食べるやつ), チブノ クウダケノ モノ (自分が食うだけのもの),

チブノガ ミタモンダカラ (自分が見たものだから), チブノ ユッタ トーリ (自分が言った通りに),

チブノ カイルト (帰ろうと), チブノ カエルマデ (帰るまで), チブノ ネムッテ (眠って), チブノ カンガエ カンガエ (考え考え), チブノ モッテ キタ (持ってきた), チブノ キキナガラ (聞きながら) のようである。ことに最後の諸例など, 「自分」はほとんど必要のない言い方である。

3. 語彙面に見られる母語の干渉 (と思われるもの)

3-1 造語の方法

接尾辞「アタ (方)」を多用する。例えば、カミサンアタ (神様方), ニンゲアタ (人間たち), ウタリアタ (仲間たち), シサムアタ (和人たち), エカシアタ (おじいさんたち), トシヨリアタ (年寄りたち), オチサンアタ (おじさんたち), フチアタ (おばあさんたち), ハポアタ (お母さんたち), ウナルペアタ (おばさんたち), オヤジアタ (お父さんたち),

オクサンアタ (奥さんたち), ネーサンアタ (姉さんたち), マゴアタ (孫たち), マーゴノヤロアタ (孫の野郎たち), ムラノモノアタ (村の者たち), ワカイモノアタ (若い者たち), ワカイシアタ (若い衆たち), タイクサンアタ (大工さんたち), ヤマゴアタ (木こりたち), オマエアタ (お前たち), オラアタ (おれたち), といったぐあいである。「センセーガタ (先生方)」が聞かれたことからしても, アタは, ガタ (方) からの音変化によって成立したものであろう。したがって, もととは敬意が含まれていたと思われるが, 「孫の野郎アタ」や「おれアタ」があるところからすれば, 少なくとも現状としては, 敬称ではなくて複数を示す接尾辞と見るべきであろう。織田氏の「～アタ」多用は, アイヌ語とのつながりを思わせる。

また, ハラソコ (腹の底), ハラナカ (腹の中), ハコナカ (箱の中), イエナカ (家の中) といった造語法がある。これは, アイヌ語の造語法に基づくものではあるまいか。

3-2 発想の方法

アイヌ語の発想法が持ち込まれたと思われるものもある。イーキモチナモノ (いい気持ちの者), キモチノイーワカイシ (気持ちのよい若い衆), セイシンガイー (精神がいい), コンジョーガイー (根性がいい), などという。アイヌネノアンアイヌ (人間らしくある人間) ということばもある。「行いの良い人のみ「アイヌ」と呼ぶのです。」(萱野1989:21)という考え方である。葛野氏によれば, 人間ばかりでなく, 木でも水でも「精神がいい」ものが尊ばれるという。

人の手助けをすることを「応援する」と言い表すのは, アイヌ語の発想であろうか。

3-3 アイヌ語の使用

織田氏の日本語の中には, アイヌ語の単語がかなり多く使われる。エカシ ekasi(おじいさん), フチ huci(おばあさん), ウタリ utari(仲間), サモ samo・シサム sisam(和人), コタン kotan(村)などはわりと普通に使われるが, ハポ hapo(母), アチャポ acapo(おじさん), オンネフチ onnehuci(年上のおばあさ

ん), ニッパ nispa(旦那), カムイノミ kamuy nomi(神への祈り), オンカミ onkami(礼拝), イチャラパ icarpa(先祖の供養), パセカムイ pase kamuy(位高き偉大な神), ワッカウシカムイ wakkaus kamuy(水の神), フチアベ hu ciap(火の女神), カムイチェブ kamuy cep(鮭), チェブケリ cep ker(鮭皮の靴), キナ kina(ござ), モーセイ mosey(イラクサ), ニカブンベ nikapunpe(ござ), ピッ pit(小石), カエカ kaeka(糸つむぎ), イオマレ iomare(酒のお酌), リムセ rimse(踊り), シノッチャ sinotca(即興歌), ハウェピリカ hawe pirka(声がよい), チセ cise(家), ワッカ wakka(水), オクイマ okuyma(おしっこ), などなど数多い。イヤイキプテ iyaykipte!(あら、おそろしい), エラム アン シリカ eram an sirka(聞けば分かる), パセノパイヤイライケレ pasenopa iyairaykere!(大変ありがとう)などは、アイヌ語そのものであろう。

4. 日本語淡路島方言の受け入れによると 思われるもの

4-0 淡路衆の移住

北海道静内町はシャクシャインの戦い(1669年)によって知られる。その後松前藩の支配地となったが、幕末当時、静内の人口は、アイヌ約1100人, 和人約50人ほどであった。明治時代になると, 明治4(1871)年に淡路島から500人あまりの武士団(徳島藩家老・淡路洲本城主稲田邦植主従)が現在の静内市街地辺りに集団入植し, 明治18(1885)年には同じく淡路島から現在の静内町豊畑に仏教系の移住団が入植した(淡路衆)。これより先明治5(1872)年には開拓使の牧場が設置され官庁の役人も住み, 明治6(1873)年には岩手県(南部衆, 仙台衆)からの入植もあった(萩中他1992:204-206より要約)。織田氏はこれらの人々の日本語を学んだわけであるが, 豊畑にはおばさんが住んでおり, 後に織田氏もここに移り住んだことから, 淡路島方言の影響が考えられる。

4-1 音声面

メー(目), テー(手)など, 1音節語を長

呼するのは, 淡路島方言(もっと広く関西方言)の特徴であるが, これは日本語北海道方言にも見られるので, どちらとも言えない。

アツバル(集まる)・アツベル(集める), イッショケンベ(一所懸命)などにおける, m > bの音変化は, あるいは淡路島方言と関係があるかもしれない。

4-2 文法面

打ち消しの言い方として, 織田氏は, ワカロナイ(分らない), イナイ(いない)など「ナイ」も用いているが, ワカラン(分らない), キカン(利かない), ヤレン(やれない), オレン(いられない), シランケンド(知らないけれど), ハラスカンヨニ(腹がすかないように), トマランナランダカラ(泊まらなければならなくなるから)など, 「ン」を非常に多く使っている。「ヘン」「ナンダ」は聞かれない。オモワンカッタ(思わなかった), アワンカッタ(合わなかった), ツカワンカッタ(使わなかったら)はいくぶんなりとも淡路島方言的か。

断定の「ヤ」を, 淡路衆2世は,

○オバサンノ ムスメヤ ナ。(おばさんの娘だね。)

○ソーヤロ ナー。(そうだろうなあ。)
のように使う。織田氏は,

○ニッパナル シトワ アーヤッテ リッパニ イタヤ。(金持ちの人はああやって立派な板造りだ。)

と言ったようであるが, よく分らない。断定の「ヤ」があるとすれば, それは淡路衆から学んだものであろう。

存続を表す「トル(ている)」を, 淡路衆2世は

○オボエトルンダベサ。(覚えているんだろうさ。)

○メー ツブットッテデモ(目をつむっていても)

○ウタリノ・コトバ ダイブン ワカトルンダ。(ウタリのことばくアイヌ語>はだいぶん分かっているんだ。)

などと使う。織田氏にも,

○ハルタチノ クズノエカシモ ビックリシ
トッタ ワ。(春立の葛野じいさんもびっくり
していたよ。)

と言った。「トル」は淡路島方言を取り入れた
ものであろう。

接続の言い方<逆接>に「ケンド」を用いる
のも淡路島方言的と言えよう。これはわりに多
い。ダケンド・シタケンド(だけど)<接続詞>
もケンド(けれど)<接続助詞>も使われる。
「サカイ」<順接>は淡路衆2世・織田氏とも
に用いない。

○キモチモ ワルイケンド(気持ちも悪いけ
れど)

○ナニモンダカ シランケンド(何者だか知
らないけれど)

○トシヨリアタワ オガンデルケンド(年寄
りたちは拝んでいるけれど)

○ダケンド, フミオサンミタイナ ハウェピ
リカ hawe pirka セバ イーケンド(だけど,
フミオさんみたいないい声で歌えるのであれば
いいけれど)

4-3 語彙面

織田氏が、淡路島方言から取り入れたと思わ
れる語には、次のようなものがある。

ネキ(そば), テッペ(山頂), オヒーサ
ン(お日さま), キンノ(昨日)<以上, 名詞>,
オル(居る), カヤス(返す), イノク・イヌ
ク(動く)・イノケル(動ける)・イノケナイ
(動けない), ハセマワル(駆け回る・走り回
る), トブ(走る)・トンデサガッテ(大急ぎ
で村の方へ下って), アリク(歩く), ヨセル
(集める), タマゲタ(驚いた)<以上, 動詞>,
スクイ(暖かい), シンドイ(だるい), ヤワ
イ(柔らかい)<形容詞>, メンメニ(めいめ
いに), モサモサ(もたもた), ヨーケ(たく
さん), ギョーサン(たくさん), ドナイ(ど
う, どんなふうに)<副詞>, ドマンナカ(真
ん真ん中)<接頭辞>, カワナリ(川沿いに)・
オイタナリ(置いたまま)<接尾辞>

5. 日本語北海道方言の受け入れによると 思われるもの

5-0 日本語北海道方言の形成

北海道南部地方を中心に、室町期から、主に
東北(青森・秋田)から移り住むものがいた。
江戸期には松前藩が置かれ、和人の社会の繁栄
を見た。次第に海岸部に広がり、東北(北部)
方言的な北海道海岸部方言を形成する。明治期
には内陸の開拓が進められ、日本全国から和人
の移住があった。ここに、海岸部方言を土台と
しながら、全国諸方言の混交により共通語化の
進んだ北海道内陸部方言が成立した。織田氏が
学んだころの日本語北海道方言は、このような
様相の中にあつて、また淡路島方言が持ち込ま
れた状況にあつたと考えられる。以下には、織
田氏の日本語に見る北海道方言の特徴を摘記し
ておこう。

5-1 音声面

1)フート(封筒), ペント(弁当), ポクジョ
(牧場), キョーソ(競争), オーソード(大
騒動), トル(通る)・トッテ(通って)など、
主に語末の長音が脱落して短呼される。

2)カンゴ(箆), コンガラナ(小柄な), オヤ
ンジ(親父), ハンダカ(裸), イママンデ(今
まで)など、ガ・ザ・ダ行音の前に撥音が挿入
される。

3)アガル(上がる), ミギ(右), モグラ(もぐら),
カゲ(影), ヤマゴ(木こり)などに、ガ行鼻音が
観察される。ただし、音韻として確立してはい
ないようである。

4)チブワ(自分は)・チブラ(自分ら)に、
撥音脱落が観察される。

5)カミサン(神様), モン(者), タカラモ
ン(宝物), タベモン(食べ物)などに, ma
>n, no>n の母音脱落が観察される。

6) イッショケンベ(一所懸命), アツベル
(集める), アツパッテ(集まって)・アツパ
レ(集まれ), オマボリ(お守り)などに, m
>b が観察される。ただし、これは淡路島方言
の特徴かもしれない。

7)テツナッテ(手伝って)に, d>n が観察
される。

8)東北(北部)方言的土台の典型として, ス・
ツ・ズの音変化がある。シガタ(姿), ムシメ

(娘), ワシレタ(忘れた)などに, ス>シが見られる。チチ(土), チケナイバ(つけなければ), チクル(作る), チカレテ(疲れて), シトチ(一つ), ニモチ(荷物), ハチモノ(初物), ヤチ(やつ), サンガチ(三月)などに, ツ>チが見られる。ミージ(水), オカジ(おかず)には, ズ>ジが見られる。

9)シト(人), シトリ(一人), シガエリ(日帰り), シキアゲテ(引き上げて), シロゲテ(広げて)などに, ヒ>シが観察される。

10)日本語北海道方言にはまた, カ・タ行音>ガ・ダ行音のような音変化が盛んであるが, アイヌ語話者は清音・濁音の区別を持たないので, ホンドニ(本当に), ナンドカ(なんとか), ムスメサンド(娘さんと)に見るぐらいで, あまり多くはない。

5-2 文法面

1)活用形式では, 一段活用(など)の命令形レ語尾, イレ(いろ), イレレ(入れろ), オキレ(起きろ), タベレ(食べろ), ミレ(見ろ), ミセレ(見せろ), ヤメレ(やめろ)などがある。サ変「する」はシル(する), ビックリシル(びっくりする)である。ほかに, キッタ(着た), ハラスキテ(腹がすいて)の例がある。

2)動詞の終止形・連体形の利用がめだつ。例えば, チクルカタカラ(作り方から), オワルヒダイニ(終わり次第に)のチクル(作る), オワル(終わる), タンボカキニ コレ ヤルニ キタバ(田圃掻きに, これをやりに来たならば)のヤル(する)や, タネ ミンナ モッテ モドルト オモッタケンド(種をみんな持って戻ろうと思ったけれど)のモドル(戻る), それに, 「みんな泣くなんから, 出はったの」(北海道教育委員会1991:96)の「泣く」など。

3)完了の言い方として, テアッタの形がある。タネモッテ オレテアッタンダナ(種を持って天から降りていたんだな), ミテアッタモノイモノアナデアッタノカ(見ていたものは, いもの穴であったのか), ニゲテアッタケ(逃げていたものだから)など。

4)推量・意志の言い方として, 「べ」がある。

オルンダベカ(いるんだろうか), ソノチカンコナイバ ネームレナインダベト オモウケンド(その時間が来なければ死ねないんだろうと思うけれど), ナーニシテ コレ キッタンダベ(いったいどういう訳でこれを切ったんだろうか), シト トーラナインダベカナ(人が通らないのだからかなあ)<以上, 推量>, ウチー イッテ ヤスムベ(家へ行って休もう), コトシモ イークベヤ(今年も行こうよ)<以上, 意志>。

5)格助詞「が」「を」「に」などの無助詞の言い方が目立つ。ハナシ シロガッテ(話が広がって), マキトッテ(薪を取って), アキナッテ(秋になって)など。ダスンデナイ(出すのではない), シルンデナイ(するのではない)も, 類例であろう。

6)格助詞「サ」には, さまざまの用法がある。ネキサオイテ(そばに置いて), ムラサイク(村へ行く)など。また, オマエサンバ ヨンデキタ(お前さんを呼んできた)の「バ」がある。

7)接続の言い方には, ユキ ボチボチ フルヨニ ナッタケ(雪がぼつぼつ降るようになってから), ユキ フカイバ(雪が深ければ), ヒノカミサン サキニ タノメバー マヨワナイデ イクンダカラ ナー(火の神様に先に頼めば迷わないであの世に行くんだからね), チンアゲナワ チクッテヤ チナイデタ(チンアゲ縄を作ってはつないでいた), ヤラナイバ モンク イワンノ イヤダカ(やらなければ文句を言われるのがいやだから)などがある。

8)可能の言い方には, テルニイ(出ることができる), タベレナイ(食べられない)などがある。

9)受け身の言い方には, コロサレル(殺される), オセラエルモンダカー(教えられるものだから)などがある。

5-3 語彙面

北海道で独自に生まれたと思われる, ナイチ(本州), バイキ(後退, バイキは英語のバックbackより。織田氏はアトバイキ(後ずさり)の形で用いる)のほかは, 大半が東北方言につ

ながるものである。代表的な語彙を列举しておこう。

ヨメッコ（嫁），バッチ（末子），メンコ（お気に入り），ババ（婆），マゴバーサン（祖母），ヤマゴ（木こり），デメン（トリ）（日雇い労務者），ボッコ（棒），アキアジ（鮭），オツネン（冬中）＜以上，名詞＞，アツカウ（世話をする），オガル（育つ，成育する），ネマル（座る，寝る），マカナウ（身仕度する），タナク（持つ），カタル（仲間に入る，加わる），チョス（いじる），ボウ（追う），ナゲル（捨てる），オセル（教える），ジョッパル（強情を張る），キモヤケル（腹が立つ），ウソコク（うそをつく），ヨッコシル（盗む），メオトス（死ぬ），デカス（作る），デハル（出る）＜以上，動詞＞，アジマシー（気持ちがいい），オッカナイ（恐ろしい），ハンカクサイ（ばからしい）＜以上，形容詞＞，アッペコッペ（反対に），ナモ・ナンモ（何も，ちつとも），ノッコリ（たくさん），タイシタ（非常に），チョコット（ちょっと），マテーニ（大切に）＜以上，副詞＞

むすび

アイヌ語話者の日本語には，明らかに母語アイヌ語の干渉と認められる特徴がある。それは，清濁の区別がないこと，サ行音とシャ行音の区別がないこと，拗音節が不明瞭なことなど，主として音声面に見られるが，文を切らずに続けていくこと，繰り返しを多用すること，助詞「に」や「しか」などの用法など，文法的側面にも観察されることが明らかになった。織田氏はまた，「kaeka シテ（糸巻きをして）」のように，アイヌ語の語彙を日本語中に挟み込むことも少なくない。その日本語北海道方言は，昭和1桁時代のものであって，共通語化の進んだ今日のものと比べれば，やや古いものであるが，そこに静内町への集団移住者たる淡路島の人々の方言が取り込まれている点は興味深い。

アイヌ語話者の日本語の特徴には，多くの話者に共通してみられるものと，個人差と思われる部分とがある。今後はそれらを詳細に検討す

ることによって，アイヌ語話者の日本語の特徴を明らかにしていきたい。

謝辞 小稿は平成7年度文部省科学研究費一般研究B「アイヌ語話者の日本語北海道方言についての研究」（課題番号05451076，研究代表者小野米一）による研究の一部である。話者として懇切にご協力いただいた故織田ステノ氏に，また調査に何かとご支援を惜しまれなかった前静内町学芸員古原敏弘氏に，心からお礼申し上げます。

注

- 1) 小野(1992)pp.127-122.
- 2) 小野（未刊）「アイヌ語話者の日本語音声－アイヌ語音声との関連を考える－」『柴田武先生喜寿記念論文集 言語学林』三省堂
- 3) 織田氏の日本語音声と語彙については，すでに菅(1991)に詳細な報告があるが，織田氏にお世話になった者のひとりとして，その日本語の特徴について，ささやかな報告を試みておきたい。
- 4) 北海道方言については，私なりに20余年間にわたって観察を続けてきた。小野(1993b)参照。
- 5) 淡路島の方言については小野自身の観察に基づくものであるが，ほかに田中(1974)，鎌田(1979)を参考にさせていただいた。
- 6) 静内町教育委員会(1991:1-4, 1992:1-4, 1995:495-496)に，織田氏の経歴についての簡単な紹介があり，萩中他(1992)に，古原氏による詳細な記述(pp.207-215)がある。また，北海道教育委員会(1991:95-115)には織田氏自身が日本語で語った半生が記録されている。
- 7) 菅泰雄氏による織田氏の文字化資料としては，村崎(1992)に，1989.8.17収録分(pp.1-32)，1990.3.25収録分(pp.33-47)，1990.3.26収録分(pp.48-64)があり，小野(1993a)に，Yukwen kamuy（悪い鹿）の日本語によるウエベケレ（昔語り）(pp.46-60)がある。いずれも私自身の耳で録音を聞き直させていただくことができた。

8) 古原敏弘氏による録音文字化資料としては、萩中他(1992)に、「いもの神さまが人間にいもを授けた話」(pp.216-270)、「豆の神さまが人間に豆を授けた話」(pp.272-319)の2話が収められている。古原氏の収録した録音資料として、アイヌ語のほか、日本語によるウエペケレが静内町郷土資料館にたくさんあり、聞かせていただくことができた。

9) 織田氏の談話資料は、北海道教育委員会(1989)『アイヌのくらしと言葉(1)』所収の若月亨・藤村久和訳註「静内町でのくらし」(pp.169-267)にも収録されているというが、未見。

10) 音声分析機によりF1-F2対応図を描くと、葛野氏の場合、オとウがきわめて近接していることを、小野(1994:136)に図示した。また、注2)の文献でも、少しく述べるところがあった。

参 考 文 献

- アイヌ民族博物館(1987)『アイヌ文化の基礎知識』白老民族文化伝承保存財団
- 石垣福雄(1991)『北海道方言辞典』増補改訂版、北海道新聞社
- 梅原 猛・藤村久和編(1990)『アイヌ学の夜明け』小学館
- 小野米一(1992)「アイヌ語話者の日本語北海道方言」『学芸国語国文学』第24号, pp.128-115
- 小野米一(1993a)『アイヌ語話者の日本語北海道方言についての研究』私家版(科研費報告書)
- 小野米一(1993b)『北海道方言の研究』学芸図書
- 小野米一(1994)「アイヌ語話者のアイヌ語と日本語」『ことばの世界』(北海道方言研究会20周年記念論文集)北海道方言研究会, pp.135-157
- 鎌田良二(1979)『兵庫県方言文法の研究』桜楓社
- 萱野 茂(1989)『やさしいアイヌ語(1)』平取町二風谷アイヌ語教室
- 萱野 茂(1994)『やさしいアイヌ語(2)』平取町二風谷アイヌ語教室
- 萱野茂他(1993)『やさしいアイヌ語(3)』平取町二風谷アイヌ語教室
- 金田一京助(1959)「アイヌ語」, 市河三喜・服部四郎編『世界言語概説』下巻, 研究社, pp.725-749
- 札幌学院大学人文学部編(1985)『北海道の民族と文化』札幌学院大学生生活協同組合
- 札幌学院大学人文学部編(1986)『北海道と少数民族』札幌学院大学生生活協同組合
- 札幌学院大学人文学部編(1990)『アイヌ文化に学ぶ』札幌学院大学生生活協同組合
- 静内町教育委員会(1991)『静内地方の伝承Ⅰー織田ステノの口承文芸(1)』静内町教育委員会
- 静内町教育委員会(1992)『静内地方の伝承Ⅱー織田ステノの口承文芸(2)』静内町教育委員会
- 静内町教育委員会(1995)『静内地方の伝承Ⅴー織田ステノの口承文芸(5)』静内町教育委員会
- ジョン・パチラー(1938・19814)『アイヌ・英・和辞典』岩波書店
- 菅 泰雄(1991)「アイヌ語静内方言話者の日本語音声と語彙」『国語国文研究』第90号, pp.64-47(pp.1-18)
- 菅 泰雄(1994)「アイヌ語講座の日本語」談話資料について」『北海道方言研究会会報』第52号, pp.2-13
- 田中萬兵衛(1974)『淡路方言研究』国書刊行会(原本は1934年発行)
- 田村すべ子(1978)「アイヌ語と日本語」, 大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語』第12巻, 岩波書店, pp.195-226
- 知里真志保(1956a)『アイヌ語入門』北海道出版企画センター
- 知里真志保(1956b)『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター
- 中川 裕(1995)『アイヌ語(千歳方言) 辞典』草風館
- 萩中美枝・畑井朝子・藤村久和・古原敏弘・村木美幸(1992)『聞き書 アイヌの食事』(日本の食生活48)農山漁村文化協会
- 北海道教育委員会(1991)『アイヌのくらしと言葉2』(アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ4)北海道文化財保護協会
- 村崎恭子(1992)『アイヌ語話者の日本語音声(1)』私家版(科研費報告書)
- 村崎恭子(1993a)『アイヌ語話者の日本語音声(2)』私家版(科研費報告書)
- 村崎恭子(1993b)『CDアイヌのことば 解説とテキスト』私家版(科研費報告書)

(受理日 1995年9月29日)

The Interference on Japanese of an Ainu-Language Speaker

— In the case of Mrs. ORITA, Suteno in Shizunai-cho, Hokkaido —

Yoneichi ONO

The purpose of this paper is to explicate the Japanese of Ainu people who have Ainu language as their mother tongue.

I pointed out before that their native language interfered in their second one on phonetic, but almost not on grammar and vocabulary. This study was done on the basis of the data of Mr. KUZUNO. Keeping the study, I found that the interruption was not only on phonetic.

In this report I illustrate the remarkable points which can be considered as Ainu interference on phonetic and suggest the possibility of meddlers on grammar and vocabulary, through the data of Mrs. ORITA. Besides, I investigate the relation between Hokkaido-Dialect and Awajishima-Dialect in Hyogo prefecture brought into Shizunai-cho in Meiji period by Awaji immigrant group.

